

# 運命を受け容れた バイヨントダム

吉友 嘉久子

よしともかくこ  
Office・よしとも代表

**立**山砂防女性サロンの会の結成から5年。10月にイタリアを訪ねた。ネパール、韓国に続く海外研修である。一行は例によってオッカチャン部隊。今回は36人が参加した。

イタリア共和国は泥流や土砂災害に悩まされているという点で日本と共通点が多く、砂防研究の技術的交流が活発だ。最初に日伊土砂災害防止技術センターが設置されたのはロンガローネ。そこに、40年以上前に大きな地すべりで多くの人々が犠牲になったバイヨントダム跡地があると聞いていた。イタリアアルプスの山麓に位置しながら観光案内には載ることがないだろう重い歴史を抱えたその地に、私は無意識のうちに“もうひとつの立山”カルデラのえん堤のイメージを重ね合わせ、この目で確かめたいと強く思っていた。そして、私的な事情から予備知識が不十

分なまま旅の空に飛んだ。

**ヴ**ェネツィアから北へ車で3時間、霧雨に煙る深い渓谷に降り立つ。標高は500メートルほど。目の前に、ダムに通じるトンネルの扉があった。鍵穴が錆びついている。国家研究評議会のアレサンドロ・パスト博士の案内で、一般の人の立ち入りが禁止されているトンネルの奥へと進んだ。

前の人の姿がかりうじて見えるくらいの闇、手掘りなのかゴツゴツした壁、歩けば水音をたてる泥んこの足元。まるで胎内潜りのような厳粛な足取りで1500メートルのトンネルを抜けると、パーッと光が射し込んで管理橋に出た。ざわつく私たちの前に、巨大な白い塊が立ちはだかる。堤高262メートル、切り立った岩場に逆三角形のえん堤が踏ん張っていた。砂防えん堤の“威容”

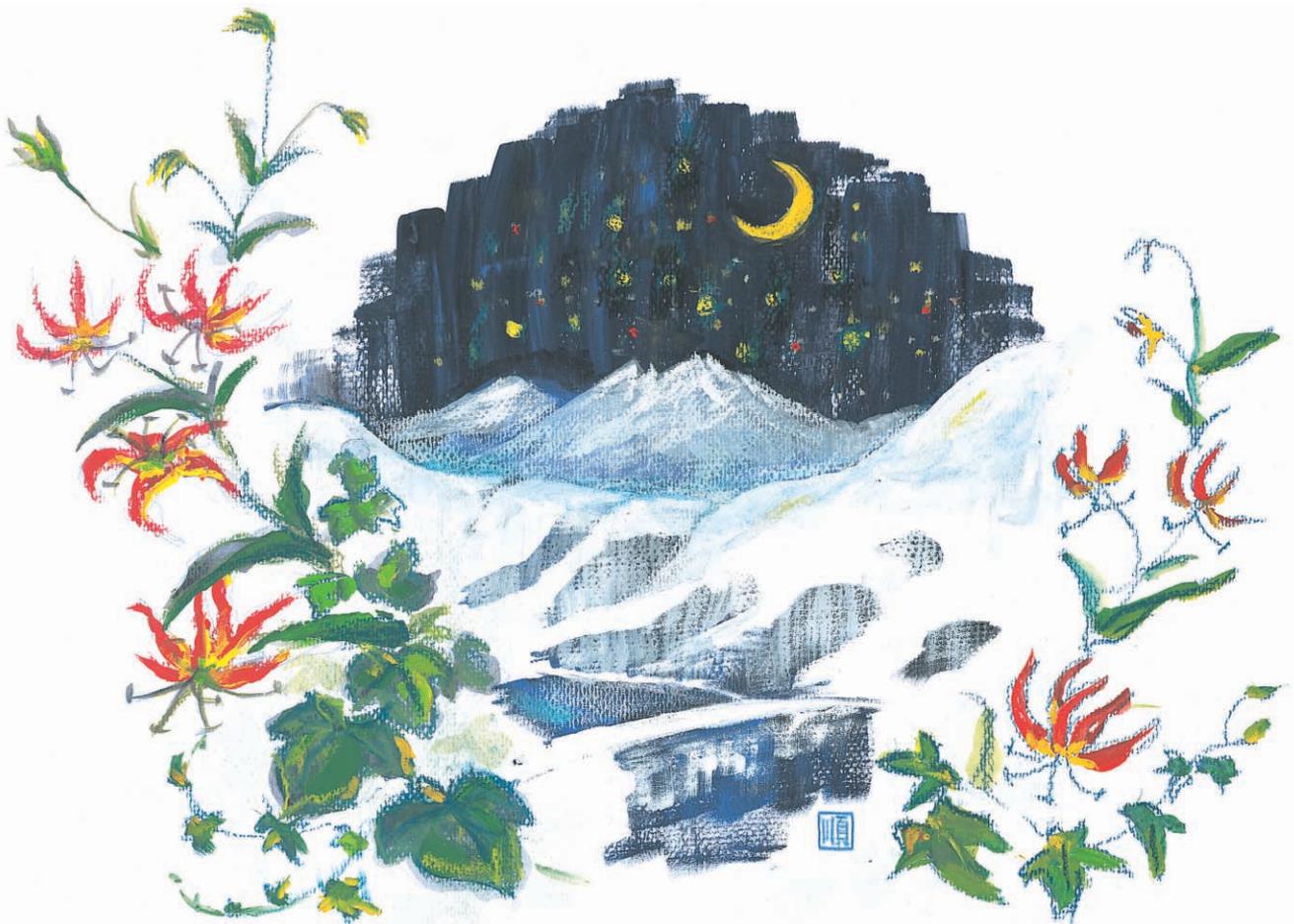


イラスト 仲野 順子

と、私の目には映った。

しかし、通訳を介して聞いたパースト博士の説明に、私は自分の耳を疑った。バイヨントダムは、発電用に作られた水力ダムだという。(えっ? 砂防えん堤じゃないの?) 砂防関係者の誰もが口にするバイヨントが水力ダムだなんて、私は考えもしなかった。恥ずかしさに打ちひしがれるなか、完成時に世界一の高さを誇ったというアーチ式水力ダムの屍を前に、パースト博士はこのダムの数奇な運命を語り始めた。

**バ**イヨントダムは、イタリアアルプスに源を発するピアーヴェ川総合開発の一環として計画され、民間の電力会社が発電用として建設した。1959年に竣工し、電力を供給していたが、まもなく電力国営化法によって国に移管された。そして竣工から4年後、バイヨントダムは試練にさらされる。1963年——日本では富山地方が「三八豪雪」に襲われ陸の孤島になった、まさにその年。イタリア北部は記録的な豪雨に見舞われ、山岳地帯では地すべりが頻発していた。10月、ついにバイヨントダムの貯水池、ダム湖で山腹が崩れ落ちる。高さ2000メートル、幅1600メートル! 日本では想像を絶する規模だ。崩落した土砂は推定2億5000万立方メートル。それが一気にダム湖を埋め尽くした。力づくで土砂に押しつけられたダム湖の水は、右岸左岸を高く飛び跳ねながら逃げ場を探して勢いを増す。渓谷の出口はえん堤しかない。そして、えん堤の天端の上を、なんと100メートルも躍り上がって飛び越え、大土石流となって、ダムから2キロ下流のロンガローネを襲った。流出からわずか5分後のことだった。

この土石流で、2000人あまりの尊い

命が奪われた。土地の人は「あれは、ボンバードだ」、まるで原子爆弾が落ちたようだったと形容する。被災現場では遺体の皮膚がはがれてなくなっていた。なかにはヴェネツィアまで流されていったものもある。それほど、水を含んだ土砂の勢いがすごかった。救助に入った人たちはその凄惨さに平常心を失い、やがて心の病を抱える人が続出した。そしてダムは機能を停止し、打ち捨てられた。



**説**明に胸が痛んだのは、この大惨事が単純な自然災害ではなかったことだ。

バイヨントダムで貯水を始めたときに、すでに貯水池の縁で地すべりは発生していたという。このことは、ダム建設周辺部の地質に問題があったことを示唆している。貯水量の管理の仕方にも問題があった。豪雨に度を失った管理者が水量を急激に減らしたことが原因で、その周辺部の縁が緩み、それが渓谷の根っこ部分を崩し、足元が崩れて大規模な地すべりを誘発したということらしい。のちの裁判では、災害発生前に住民を避難させるべきだったとして、関係者8人が有罪の判決を受けた。災害は予測可能なものだったと判断されたのだ。

この尊い犠牲のもとに、ダム建設に際してイタリアでも事前の地質調査が重要視されるようになった、とパースト博士は語る。苦い思いがこめられているようだった。どんなに頑丈なえん

堤をつくっても、周囲の山腹の地質がもろければ崩落する。当たり前なことなのに……。異国のことながら聞いていて悲しく、やるせなく、腹立たしかった。無知の恥ずかしさは消し飛んでいた。

トンネルを引き返し、山道を車で上流にたどってダムの堤頂部に立つ。事故から43年。周囲の山肌には今も崩れの跡が生々しく残っていた。しかし、天端は意外なほどに損傷が少ない。中ほどまで歩いて、この上を、土砂を含んだ水が100メートルもの高さでオーバーフローした状態を思い浮かべてみた。10月9日、22時39分。そのとき、ロンガローネの村人の多くは夢路に就いていたかもしれない。何事が起こったか、知る暇もなかったろう。目を閉じて、高ぶる気持ちをこらえる。水が100メートルの高さを、ハードルを越えるように飛び跳ねたから天端は損傷しなかった。そして、2000人もの命と引き換えに、えん堤はほとんど無傷で残された。

発電の機能を停止したダムのえん堤が、ひっそりと足元にある。上流側には水はなく、土砂が堆積していた。振り返ると、V字にくびれた岩場の間から眼下にロンガローネの町並が見える。まるでカルデラのえん堤みたい……。私は感じた。このダムは今、砂防えん堤になりきっている。ただの屍じゃない、苛酷な運命を受容し、無謀な人間の罪を背負い、立ち往生して砂防えん堤になった。そして、ここから警告しているのだ。バイヨントのつらい歴史を忘れるな。過ちを繰り返すな、と。

この声なき声に耳を傾け、自分たちの声で伝えていこう。それが、今を生きる私たちにできるたった一つのことだから。帰りの空で、こう思った。

(了)